

V 研究のまとめ

1 考察

(1) 『自己受容』に向かうこと

我々教員は、日々、児童生徒や保護者、同僚という「人」に関わることを職務としている以上、『人間関係』に視点をあてた研修を積み上げていくことが重要なことは周知の事実である。

浜田教育センターでの長期研修においては、この『人間関係』づくりのために自分自身がどうあるべきなのかにまず焦点をあてることをベースに研修を積んでいく。具体的には、「グループ・エンカウンター」「傾聴訓練」といった研修手法をとるが、それにとどまらず、日常のさりげない会話の中に潜んでいる研修材料を見逃さないことを何よりも大切にしている。

B教諭の取組の中で図示した、クライアントの問題解決への筋道の一例を下に再掲する。

※ 自由で安全な「空間」と「時間」の中で

- ① 『自己覚知』（「あ、自分ってこんな感じだったんだ！」）
↓
- ② 『自己吟味』（「どうしてそうなんだろう？」）
↓
- ③ 『自己理解』（「自分ってこんな感じで生きてるんだなあ！」）
↓
- ④ 『自己受容』（「全部ひっくるめて自分なんだよなあ！」）
↓
- ⑤ 『問題解決への意志』（自信・希望・勇気など）
↓
- ⑥ 『問題解決へ』

『自己受容』とは大きな概念であり、そこに向かうための道筋には幾多の要素を含んでいると考えるが、聞き取りの中で明確になったのは「他者に受け容れてもらう」安心感である。

センターでは自分が普段どんな思いで生きてきたかみたいなどころまで聞いてもらえる。聞いてもらえるから私も語るんですね。 (A教諭)

大きかったのは、絶対的に信頼できる仲間との出会いですね。(中略) それまで出しにくいものがあったても、センターで出してみたら案外関わってもらえたんで

す。 (B 教諭)

などの言葉がそれを物語る。

「自分自身を受け容れる」ためには、誰か「他者に受け容れてもらう」という前段階が必要なのであろう。＜図1＞の④の部分の作業は本人にとって相当の困難さを伴うものである。どちらかというとな否定的にとらえていた自分のある部分を、肯定的にとらえに転換するポイントだからである。

センターでは相談の時間だけでなく、日々の暮らしの中で『自分と相手を大切にする』関わりに重点を置いて生活している。

人の「思い」「考え」「感じ」は決してコントロールしてはならない。

との信念のもと、自分も相手も尊重した人間関係を心がけている。

そうした人間関係の中で、「他者に受け容れてもらう」という体験をした彼らは、『自己受容』に向かい、『他者受容』に向かったのではないだろうか。『自己受容』を繰り返していく中で『自尊感情』が高まり、自分に対する信頼感が増していった彼らは、存在感ある一人の「人」として相手に向かうことができたのだらうと考える。

(2) 自分を客観的に見ること

我々教員は、自分のことを自分の中の物差しで見てしまい、それによって自分像を組み立ててしまうことが多いのではないだろうか。1年間にわたる長期研修の中で、自分像を客観的に組み直したという話も多く出てきた。

手探りでやっていたときに比べたら、少し考えてやろうというふうに自分を見つめる目が少し養われた。 (D 教諭)

今は、自分はこう思うけど、でも人の物差しでいくとどうなんだろうって考えるようになりました。 (E 教諭)

相手の様子を見て関わっていかうとするようになったんです。 (F 教諭)

これらの語りから伝わってくるように、自分本位の関わりから、「こんなふうに関わる自分は相手にどう感じられているのだろうか？」という視点を持った関わりに変化していった彼らの様子がうかがえる。

スタッフは教育相談に臨む際、

関わりがいいか悪いかの答えは、すべてクライアント（来談者）がもっている

ことを前提としている。どれだけ正論を話しても、それがクライアントに入っていかなければ無意味なのである。この視点を常に意識しながら研修を重ねた彼らは、客観的に自分を見る態度を身につけていったのである。

また、D教諭の「チームでの取り組み」の実践のように、一人で抱え込まないでチームで関わっていくことを可能にしたのも、D教諭の自分を『客観的に』見るという姿勢が大きいと考えられる。

(3) 自分らしく存在すること

『自己受容』に伴って、『自尊感情』が高まっていくことによって、彼らは子ども達の前に立つ自分が意識できるようになっていく。

「こんな自分を出したら恥ずかしい」「思ったことをそのまま言うと、子どもとの人間関係が崩れていくのでは・・・」などと、自分の気持ちに『誠実』でない立ち方に気付き、自分の気持ちに『誠実』に関わる彼らの姿が伝わってくる。一見、人間関係が崩れるというリスクを伴いそうな立ち方であるが、それが本当は目の前の人を大切にしたい関わりであると彼らは気付いたのである。

「マイナス感情を溜めない」関わり

(A教諭)

自分の中のマイナス感情を否定しなくなったこと

(B教諭)

自分と向き合い、自分の感じ方を大事に思えるようになったこと (C教諭)

自分の中に「マイナス感情」が湧いてきたとき、できるだけその感情を隠そうとか抑えようとするのは、社会人としての常識なのかもしれない。しかし、それでは浅い人間関係しか築けず、子どもの心の芯の部分に届くような関わりはできないと、彼らは感じていた。

「グループ・エンカウンター」等の研修の中で、少し怖いけれども自分のありのままの感じを相手に伝える体験を重ねた彼らは、『誠実に』関わることの大切さを学んでいった。

自分の気持ちをごまかして接するということが相手にも失礼なことではないということに、いろいろな人に向き合う体験を通して感じるようになったんです。

(H教諭)

真に自分や相手を大切にすることとはどういうことなのか。彼らは自問自答しな

がら、毎回の来所相談や体験的研修に臨み続けていた。

(4) 『個』を意識した関わりを大切にすること

彼らは教員として、研修に入るまで子ども達一人ひとりを大切にした教育をと実践を積んで来ていた。しかし研修を重ねていく中で、本当の意味での『個』に向かっていたことがなかったことに気付くこともあった。

センターの教育相談では、来所する子どもや親と一对一の時間を1時間過ごすシステムになっている。「人」をクライアントが感じるのに最適な環境だという考えからである。そこには、当然一对一であるがゆえの緊張感も伴う。

以前の自分は、そういう子にあまり関わらない、どう関わっていいのかわからないので、どちらかという引いてしまう・・・(中略)センターでの研修を受けさせてもらって、まず距離的にそばに行ける・・・「こういうこと言ったら傷つけるかな」と思ったことが、自信じゃないけど、「こういうこと言っても大丈夫かな」と・・・
(F 教諭)

学校の中では、『集団』に向かうことには慣れてきたが、たった一人の『個』に向かうことには慣れていない研修員もいた。ここでの相談の経験を通して、一对一の人間関係に少しずつ積極的に慣れた感じが伝わってくる。

また、長期研修前に『個』に関わる際に「人」に関わらず「事柄」に関わってうまくいかなかった話も聞くことができた。

この子の来られん理由は運動が苦手であるとか、人付き合いが苦手であることに對して(中略)運動が苦手であるという意識を変えられるように、私が一緒に運動したりして運動を苦手でなくさせるとか、人付き合いでも「こうしたらいいよ」と、まあ、私が教え込むような形で・・・
(D 教諭)

『個』に関わっているのだけれども、そこにいる「人」に関わっていなかった。一对一の相談を重ねていく中で、こういったズレに気付いていく場面もあった。

保護者への関わりの中でも、センターでは、

目の前にいるその「人」に関わる

ことを大切に取り組んでいる。今ここで自分に向かっているこの「人」はどんな思いでいるのか、どんな困難を抱えているのか、それを受け止め関わっていくことこそが『個』に関わるということなのだと考えている。

子どもさんのことを話してるんだけど、そのお母さんと話すという感覚、目の前

にいるお母さんを大事にして話すという瞬間があるというか・・・ (G教諭)

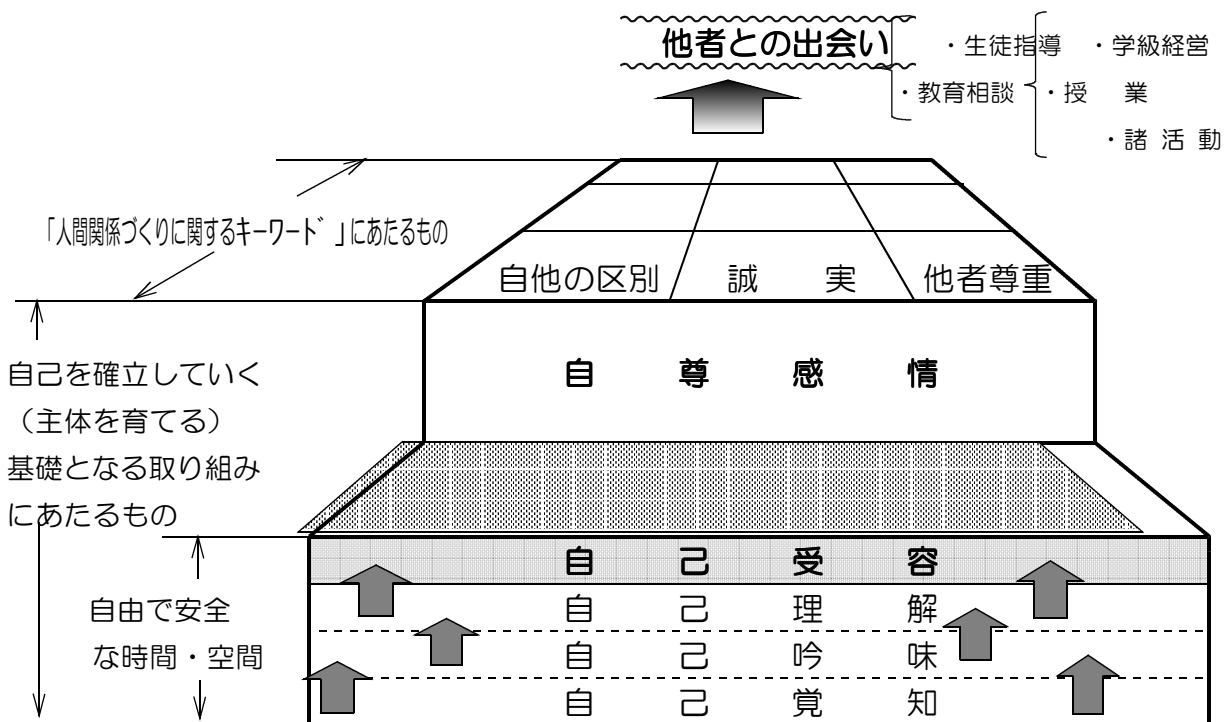
この感覚をもちながら子どもや保護者という『個』に向かう。それが血の通う教育活動の原点であると考えます。

2 まとめ

今回の聞き取り調査は、1年間の長期研修の成果が学校現場でどう機能しているかを聞き取り、今後のセンターでの研修に生かすこと、つまり長期研修をして何が役に立ったのかを学校現場での実践から検証することを目的として行った。

考察で明らかになった4つの項目を「人間関係づくりに関するキーワード」に照らし合わせ、相応するキーワードを当ててみた。そして、この当てはめたキーワードを使って考察で述べたことを図示してみる。

- | | | |
|--------------------|-------|-------|
| ①『自己受容』に向かうこと | ----- | 自己受容 |
| ②自分を客観的に見ること | ----- | 自他の区別 |
| ③自分らしく存在すること | ----- | 誠実 |
| ④個を意識した関わりを大切にすること | ----- | 他者尊重 |



自分の「思い」「考え」「感じ」をコントロールされない自由で安全な空間や時間の中で自己受容を繰り返していくことが、唯一の存在としての自分を愛おしいと感じる自尊感情の高まりにつながる。この自尊感情が基盤になり、自分を客観的に見て他と区別することや自分にも相手にも誠実に向き合うこと、個を大切にする他者尊重など「人間関係づくりに関するキーワード」に取り組む勇気を生んでいる。そして、この一連の自分らしく生きるために費やした自分と真剣に向き合った時間の確かさが、主体を育てる自己変容につながったものとする。

自分が信じられずに呻吟したり、自分の本音に気づいて心がふるえたり、自分をさらけ出すのに勇気を振り絞ったり、時には逃げ出したい気持ちとも必死に向き合った貴重な体験が、主体的に自分らしく生きることの充実感や人と心から出会うことの喜びにつながっていったのではないだろうか。聞き取り調査を振り返る今、協力者その人が己の人生を主体的に生きようとしている生き方に触れることができた思いである。

学校を離れ、1年間研修を受けようと決意すること自体の重みと共に、1年間の研修の持つ重みをひしひしと感じる聞き取り調査でもあり、研修を担当するものとして責任の重大さに身が引き締まる思いである。これからも、センター相談室での研修は主体を育て、自己の確立を目指していく場でありたい。そして、長期研修を選択した研修員の気持ちに応えることの出来る場であるために、受け入れる側の日々の自己研鑽を怠らず、共に学校現場で役に立つ生徒指導、教育相談を模索し続ける仲間として努めていきたいと思う。

本研究は、聞き取りに協力してくださった方々の貴重な体験に基づくものである。改めて深くお礼を申し上げたい。忙しい中、聞き取らせていただいた方に「話すことで自分自身整理が出来ました。」「自分にとってもいい時間でした」と言っていただいたことは貴重な時間を割いていただき、申し訳なく思っていた私たちにとっては有り難いことであった。この聞き取りを通して整理できたことを、これからのセンターでの長期研修や研修講座運営に生かしていくことで協力してくださった方々のお気持ちに応えていきたい。

平成18年度 研究紀要

平成19年3月31日発行

編集兼 島根県立浜田教育センター
発行人 所長 木村保孝
発行所 島根県浜田市長沢町1550-1
島根県立浜田教育センター
TEL 0855-23-6782
印刷 有限会社 原印刷
